1998. 9. 10

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報 第26号

事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184-0015 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL.&FAX. 0423-27-2890

子どもからの出発を！

広島大学学校教育学部教授
長澤泰子

「学習障害」に関連した研修会や事例研究会が飛躍的に多くなり、「障害の理解・子どもの理解・周囲の理解」が叫ばれるようになりました。このこと自体は大変喜ばしいことだと思います。今までは「その他」の問題をもつ子ども・「困った子ども」として、理解の対象外だったのですから。でも、これで安心していられない現状があります。

第一に、障害の理解が必ずしもスムーズに行われているわけではないことです。典型例に対する定義はなされたとしても、典型例といえる子どもは少ないからです。第二に、子どもの理解と障害の理解が混同されているように思われることです。障害を理解するということは、子どもの理解の一助にはなると思いますが同じではありません。第三に、周囲の理解は理想から程遠いといってよいでしょう。各地に親の会や研究会が結成され、マスコミにも取り上げられているものの、これからが正念場だと思います。

以上、客観的な書き方をしましたが、実は、子どもと接している私たち自身の理解を省みる必要に迫られます。

子どもの指導は、検査→診断→指導方針という手順で行います。優秀な教師や臨床家は、この過程で、子どもの「心情を読み取り、共感的な対応」をしています。が、このことは、当然のことと考えられ、論文や事例報告には、殆ど記載されていません。したがって、子どもの障害を詳細に分析し、対処することが指導であると考えられ、「障害の理解」があたかも「子どもの理解」であるかのような錯覚に陥ります。

「子どもの理解」は、子どもが何を考え、何を思い、何を感じているかを知ることから始まり、「障害の理解」は、なにが出来て何が出来ないかを知ることから始まると私は考えています。これらは、車の両輪のようなもので、どちらが欠けてもどちらに偏ってもまずいのです。現在は後者に偏り過ぎているようです。子どもとしっかりと向き合い、子どもから出発することにより、前者が深まり、障害に対するよりよい理解が可能となり、結果として、周囲の理解も深まることと考えます。